

Shelley の *Epipsychidion* における 詩を書くことの効用

——「愛」と「愛し方」の不一致について——

藤 田 幸 広

詩人は書くことによって、読者以上に自己の精神を覚醒させることがある。詩という媒介物を通じて、日記や手紙よりも誠実に本心を打ち明けて書かれた告白。このような心の産物は、たとえそれが読者の目に触れる前に消滅したとしても、詩人にとっては作品として成立するのである。Shelley の *Epipsychidion* はそんな作品の一つかもしれない。¹⁾

1820 年 11 月末、Shelley は Teresa Viviani (通称 Emilia または Emily) というある不遇な女性を紹介される。²⁾ 彼女はピサの政治家である冷酷な父と浪費家の母をもち、結婚が持参金なしで強制的に決まるまで修道院に幽閉されていた。そんな彼女の不幸な境遇は、Mary Shelley、Claire Clairmont、Thomas Medwin そして Shelley に知られ、彼らは彼女に深い同情を寄せた。また彼女の繊細で知的な性格と端正な容姿は、Shelley の心を充分に魅了し、彼は彼女に対して情熱的愛を抱くようになる。³⁾ それは妻であ

- 1) この論文は、詩の修辞学的解釈を否定しているものではない。なぜならこの論文は、当然のことながら、詩人の創作過程における歴史的資料よりも、むしろ最終的な詩作品の解釈に重点を置いて分析されたものだからである。しかし筆者は、歴史的解釈 (historical interpretations) と修辞学的解釈 (rhetorical interpretations) をできるだけ総合的に利用することに心掛けた。
- 2) ここでの記述は、Newman Ivey White, *Shelley*, 2 vols (London: Secker, Warburg, 1947) 2: 247-53 を参照。
- 3) Shelley は 1821 年 1 月 16 日の Claire Clairmont 宛の手紙の中で、Emilia への愛をはのめかしている。Percy Bysshe Shelley, *The Letters of Percy Bysshe Shelley*, 2 vols, ed. Frederick L. Jones (Oxford: Clarendon, 1964) 2: 256 参照。

る Mary に出会ったとき以来の経験であった。この Shelley の彼女に対する熱情は、結果として彼に一つの詩を書かせることになる、*Epipsychidion* である。妻のいる Shelley にとって、この 19 歳の女性へ愛の詩を書くことは、ある意味、危険な行為だった。⁴⁾ なぜ Shelley はこのいわば「禁断の題材」⁵⁾ を扱って詩を書く必要があったのか。

1821 年 2 月に *Epipsychidion* を完成させた Shelley は、最終的にこの詩を出版する。しかし、彼は出版のためでなく、自分自身のためにこの詩を書いたのではないだろうか。なぜなら、Shelley は Emilia への愛を自分自身の問題として主観的に清算してしまっているからである。このことは、Plato、Dante、Petrarch、Shakespeare、そして“The Song of Songs” (The Song of Solomon) などの表現様式や Shelley 本来の抒情性にデフォルメされることによって、直接的に書かれている。しかし一方で、Shelley はその逆説的な効果のため、読者の反応を恐れていたと思われる。つまりそれは詩の表現上の問題ではなく、自分自身を露呈するという問題であった。さらに、詩人はこの詩の中で、主題に関する新たな問題を生み出している。本論では、このようなことを考えながら、Shelley が「書く」という行為を通じて Emilia への情熱的愛をどのように展開させていくのかを、「性愛」をキーワードにして考察してみる。

I. 愛の障害と詩を書くことの効用

Epipsychidion という題名は「魂の魂」(soul of my soul) または「魂に関して」(On the Subject of the Soul) という意味として考えられ、詩人と Emilia による魂と魂の結合という形而上的なイメージをもっているが、一方で、「結婚祝歌」(epithalamion) という性に関係する言葉を彷彿させてい

4) Shelley は、妻 Mary が Emilia の境遇に同情している一方で、彼女に対して嫉妬と反感のようなものを抱いていることを感じていたと思われる。White 2: 252–53 参照。

5) Desmond King-Hele, *Shelley: His Thought and Work* (London: Macmillan, 1960) 276.

る。⁶⁾「結婚祝歌」という言葉は、“The Song of Solomon”のように「魂の婚礼」という聖書上の寓話的な比喩としての解釈も考えられるが、⁷⁾ 詩人の場合、「結婚」を通じて理想と現実との葛藤を暗示しているようにもとれる。また *Epipsychidion* は、宮廷恋愛 (courtly love) 風の女性賛美や「理想美」(Intellectual Beauty) を、Emilia を通じて単純明快に歌っている詩ではない。この詩における愛の問題は、詩人の形而上的理論と現実とが複雑に絡み合って表現されているのである。これらの第一の理由は、愛すもの (Shelley) と愛されるもの (Emilia) 以外の人物、すなわち Shelley の妻 Mary の登場にある。作品の中で、詩人は絶えず妻の存在を意識している。作品の冒頭で、詩人は頓呼法 (apostrophe) の羅列によって、Emilia の不遇な状況に同情し、また彼女の高貴さを高々に賛美する。一見、伝統的な女性賛美の恋愛詩のように見えるが、彼が彼女に対して恋人以外の関係を望み、また自分の妻の存在を登場させた時点で、そのイメージは突然打ち砕かれる。

6) Desmond King-Hele によると、*Epipsychidion* という言葉は、Shelley が “epi-cycles” (プトレマイオス系の「周転円」) と類似させて造った名詞 *epipsyche* とギリシア語の親しみを込めた接尾辞 *-idion* (little) とで構成され、さらに “cycle” は *psyche* (soul) と置き換えられて、“a little soul upon a soul” という意味になる (275)。White は、“On Love” での “a soul within our soul” (474) という言葉と関連させて、ほぼこの説を取って “soul of my soul” と訳している (2: 254-55)。一方、Earl R. Wasserman や Kenneth Neill Cameron は、*Epipsychidion* はギリシア語の前置詞 *epi-* (upon the subject of) と *psyche* に *-idion* が付いた名詞 *psychidion* (little soul) が合成して、Hadrian の *De animula* のように、“On the Subject of the Soul” という意味になるという説を取っている。Donald H. Reiman と Sharon B. Powers も同様の説に従っている。Earl R. Wasserman, *Shelley: A Critical Reading* (London: Johns Hopkins, 1971) 419、Kenneth Neill Cameron, *Shelley: The Golden Years* (Cambridge: Harvard UP, 1974) 278、そして Percy Bysshe Shelley, *Shelley's Poetry and Prose*, ed. Donald H. Reiman and Sharon B. Powers (London: Norton, 1977) 372 参照。さらに、Neville Rogers, King-Hele, Wasserman、そして Cameron といった批評家は、この題名が「結婚祝歌」(epithalamion) という言葉を想起させていると主張している。Neville Rogers, *Shelley at Work: A Critical Inquiry* (Oxford: Clarendon, 1956) 245 参照。尚、“On Love” ならびに *Epipsychidion* からの引用は *Poetry and Prose* 473-74; 374-88 からで、詩の引用部分には括弧内に行数を記した。

7) Wasserman 420.

Would we two had been twins of the same mother!
 Or, that the name my heart lent to another
 Could be a sister's bond for her and thee,
 Blending two beams of one eternity!
 Yet were one lawful and the other true,
 These names, though dear, could paint not, as is due. (45-50)

「私たち」(we)とは詩人と Emilia のことであり、「他の人」(another)とは詩人の妻 Mary のことを指すが、この三角関係がこの詩に大きな影を落とすことになる。詩人は Emilia を恋人ではなく血縁の関係であることを望むが、それだけではない。彼は(“the name”が示している)「妻」という名をもった Mary に対しても Emilia と姉妹の関係であることを望むのである。これは性的な関係から生じるいわば不倫の関係を防ぐための手段であり、また同時に Emilia への愛を表現できるための手段ではないだろうか。妻をもつ Shelley にとって、Emilia を直接的に愛せないのが現実である。もし彼女と親族という関係によって結ばれることができれば、異性ではあっても他の理由で愛を表現することができるのである。⁸⁾ もちろん、これには近親相姦が不道德であるという前提がある。⁹⁾ しかし、Mary を配慮しようとする良心とは裏腹に、自由愛を束縛する結婚制度を社会的な道徳観から容認しなくてはならないという詩人の不満は、「一つは法律上のもので、一つは真実のものであるとしても」(were one lawful and the other true)や「契約の証し」(139; a seal)という言葉によって明確に示されている。¹⁰⁾ この主観的問題の結果、詩人の怒りの対象は、Emilia の幽閉に象

8) Shelley は Emilia が妹のような愛情で自分に接しているのを理解していた。White 2: 250, 256 参照。

9) Shelley が近親相姦を悪と見るのは、*The Cenci* における Cenci と彼の娘 Beatrice の関係を見れば明らかである。

10) 結婚制度の拘束と自由愛に関しては、まだ William Godwin の思想の影響が見られる。King-Hele は、Godwin 同様 Shelley は自由愛を支持する一方、結婚制度を廃止して改善することは人間には本質的に不可能だということを認めていたかもしれないと言っているが(273)、筆者はこの意見に関して、Geoffrey Ward 同様、懐疑的である。Geoffrey Ward, “Transforming Presence: Poetic idealism in *Prometheus Unbound* and *Epipsychidion*,” *Essays on Shelley*,

徴される社会的権力から、詩人が彼女を愛せない社会的道徳観へと変化してしまう。にもかかわらず、彼は Emilia への熱情を冷却しなければならないという義務感によって、現実ではなく「想像の世界」(70; The world of fancies) で彼女を求めていくのである。そしてこの「想像の世界」とは、Donald H. Reiman の言う「人間の詩的能力」によってつくられた詩の世界に他ならない。¹¹⁾

つまり、Shelley は自己に内在する苦悩を、私的側面 (Emilia に対する愛の熱情) と社会的側面 (妻の存在と不倫という意識) から詩の世界で解決しなければならなかった。したがって、彼にとって詩を書くという行為は、Emilia への愛を昇華させるための手段ではなく、むしろ愛してはならない女性への想いが生み出した熱情を処理するための手段であり、¹²⁾ 同時にその愛によって生まれた苦悩を冷静に解釈するための手段だといえるのではないだろうか。読者からすれば、この詩は「詩人自身の弱さ」(71; mine own infirmity) を露呈しているだけで、最終部分の理想世界での愛の成就是現実逃避に他ならないと思えるかもしれない。しかし *Epipsychidion* には、Shelley の「性愛」に対する強い信念が織り込まれていることを忘れてはならない。もちろん、現実世界に直面したとき、詩人としての彼は、この信念によって多くの苦戦を強いられるのであるが。

ed. Miriam Allott (Liverpool: Liverpool UP, 1982) 207–08 参照。だが現実の問題として、Shelley が結婚を社会的に認知された契約として見ていることは確かであり、異性を愛することに付随してく一つの強迫観念となっていたと思われる。

11) Donald H. Reiman, *Percy Bysshe Shelley* (New York: Twayne, 1969) 127.

12) この熱情の処理という点においては *Julie; ou, La Nouvelle Héloïse* を書いた Rousseau の動機と似ている。*Les Confessions* 第9巻参照。Reiman は、*Julie* における作者自身 (Rousseau) と登場人物としての作者 (Saint-Preux) との関係は、*Epipsychidion* でのそれと同じであると指摘している。Donald H. Reiman, *Shelley's "The Triumph of Life": A Critical Study* (Urbana: U of Illinois P, 1965) 59–60 参照。また Monika Lee は、*Julie* と *The Triumph of Life* での「言葉」は共に「実現できない欲求の緩和剤」となっていると指摘しているが、*Epipsychidion* を書くという行為も同じ特質をもっているといえる。Monika Lee, *Rousseau's Impact on Shelley: Figuring the Written Self* (New York: Mellen, 1999) 159 参照。

II. 性愛の肯定

Shelley はイタリアに渡った 1818 年の 7 月、Plato の *Symposium* を読み、またそれを翻訳しているが、これは彼の思想の大きな転機となった。Shelley は、Plato の「人間というよりはむしろ不滅の魂による言葉」¹³⁾ によって、(*Symposium* の主題がそうであるように) 愛、特に性愛の概念について大きな影響を受けた。*Symposium* の中で愛(エロス)は、肉体的にも精神的にも不滅性の欲求という意味において、自然にして善なる行為とされている。Shelley は *Symposium* の翻訳を終えた直後、“A Discourse on the Manners of the Ancient Greeks Relative to the Subject of Love”を書き、その中で特に「性愛」(sexual intercourse)の問題について論じているが、そこでは大方 Plato の思想に従っている。¹⁴⁾ しかし、このような Shelley の性愛観は、その後の個人的な人間関係や事件の影響によって複雑化していくことになる。¹⁵⁾ 理想的な愛を歌った *Prometheus Unbound* と私生活を反映している *Julian and Maddalo* が、同時期(1818 年秋から翌年にかけて)に書かれているのはその複雑性の一例であり、*Epipsychidion* の内容も同様である。この複雑性の根底にあるのは無論、理想と現実の矛盾に他ならない。

Epipsychidion において、「性愛」は形而上的側面から肯定的に論じられ、Emilia への愛を通じて情熱的に表現されている。そこには現実を理想へと近づけようとする Shelley の姿がある。

True Love in this differs from gold and clay,
That to divide is not to take away.

.....

13) Percy Bysshe Shelley, “On *The Symposium* or Preface to *the Banquet* of Plato,” *Shelley on Love: An Anthology*, ed. Richard Holmes (London: Anvil, 1980) 113.

14) *Shelley on Love* 109 参照。

15) これには、子どもの死と妻 Mary の神経衰弱、Claire、Byron、Edward Williams との人間関係、Sophia Stacy、Emilia、Jane Williams といった女性たちとの出会い、そして Mary の流産などが考えられる。

If you divide pleasure and love and thought,
 Each part exceeds the whole; and we know not
 How much, while any yet remains unshared,
 Of pleasure may be gained, of sorrow spared. (160–61, 180–83)

一つ一つを「取り除く」(to take away) のではなく「分かち」(to divide) というプラトン主義的な描写に見られるように、ここでは、愛は肉欲的な表現ではなく、人間が本来もっている「美への追求」というイデア論的な表現によって論じられている。King-Hele が指摘するように、このような愛の表現は、Shelley にとって妻 Mary を侮辱することなく Emilia を愛せる手段となったかもしれない。¹⁶⁾ だが、この箇所には Emilia への熱情を感情だけではなく、自己の理想を説いた思想によって解釈しようという詩人の試みが見られる。なぜなら、このプラトン主義的な表現の部分(149–73)は、床尾辰男氏によると、Shelley が Emilia に出会う約1年前に書かれたものだからである。¹⁷⁾ しかし、これは意図的な草案の組み合わせであり、174–89行目の表現がそれを裏付けている。「歓喜、愛、思想」(pleasure and love and thought) という表現は、「愛」という「真理」を中心として「歓喜」という提喩(synecdoche)で示されている「感情」と「思想」が横に並列している完全な状態を意味している。そしてこれら三つが一つも削除されることなく、それぞれが有機的なものとして存在することに、真の歓喜が訪れるのである。愛は感情(または熱情)と思想と両方の精神的崇高性によって感受されなくてはならない。このとき詩人は、プラト

16) White も同様の指摘をしているが(2: 260)、King-Hele は同時に「理想的愛を分かちということ」に関しては Dante の *Purgatorio*、詩篇 XV の 46–75 行目のエコーであるかもしれないと指摘している(274)。

17) 床尾辰男氏の証明によると、*Epipsychidion* の 149–73 行目の草案は、*Prometheus Unbound* の第4幕が書かれた 1819 年 11–12 月とほぼ同じ時期に書かれ、本来 *Epipsychidion* のために書かれたものではない。また、床尾氏は“Fragments Connected with *Epipsychidion*” の 1–141 行目に登場する女性は、Sophia Stacey ではないかと推測している。Tatsuo Tokoo, “The Composition of *Epipsychidion*: Some Manuscript Evidence,” *Keats-Shelley Journal*, 42 (1993) 97–103 参照。

ン主義的観念が彼が抱える問題を解く試金石になると考えていたに違いない。

Emilia への熱情を理想的な愛に近づけるため、Shelley は「若さ」(Youth) という表現を使っている。「若さ」は自然に見られる永遠的・不変的魅力をもたせて性愛を神聖化する手段になっている。

Young Love should teach Time, in his own grey style,
All that thou art. . . (55-56)

冒頭の Invocation において、“Emily” という具体的な名が登場するのは、彼女が「このように完璧につくられた若さの幻影」(42; Youth's vision thus made perfect) と呼ばれた直後であり、また Shelley が Emilia と出会ったときを描写している部分(72-123)で、彼女が「春、若さ、そして朝の隠喩」(120; A Metaphor of Spring and Youth and Morning)や「肉体化された4月のような幻影」(121; A Vision like incarnate April)と言い換えられるのは、青年期に芽生える性への意識を暗示している。また「若さ」は熱気と瑞々しさを伴う。Emilia の流れるような囁きは「熱情をもって感覚を殺し」(85; Killing the sense with passion)、また彼女の熱狂的な香りは、「凍った蕾に芯まで溶け入る燃えるような露のように感覚を超えて」(110-11; Beyond the sense, like fiery dew that melt / Into the bosom of a frozen bud)、魂の中で感じられる。これらの表現には官能的なイメージが溢れているものの、若々しさと力強さが同時に満ちている。

しかし、Emilia への賛美が愛への賛美へと転換されていく過程の中で、「現実」はその障害として大きく立ちはだかる。性愛とそれに伴う熱情を肯定し人生の一つの糧としたい願望、それを実際に体現できない現状、社会的道徳観、妻 Mary の存在、これらのものが、詩人に大きな焦燥をもたらしていく。詩人にとって、このやり場のない思いを愛人や友人を探して紛らわすとか、冷えきった忘却へと葬るという現代の道徳で片付けてしまうことは(149-54)、絶対許せなかった。それこそ「敗北の道」(154; the

beaten road) を歩く犠牲者である。¹⁸⁾ Emilia への賛美や幻想の世界での愛の成就に止まらず、心の動揺をあえて冷静に解釈しようと試みるところに、思想詩人 Shelley の新たな追究心が見られる。その結果として、詩人自身の自叙伝的告白が作品の中心に挿入されていると筆者は考える。

III. 愛と愛し方の不一致

詩人の自叙伝的告白の部分 (190-383) は、象徴的に描写されているものの、非常に痛々しいものがある。¹⁹⁾ ここで詩人は自己の経験を理想に照合しようとしている。これは性愛そのものを肯定したいという意識の裏付けではないだろうか。しかし、自分自身の女性経験を赤裸々に書くということは、詩人が読者を意識した場合、自分の社会的立場を大きな危険にさらす要因になり得る。したがって、本論の始めに述べたように、象徴化によってデフォルメする手法は、自分の本心を直接的に伝える上でも、自分の名前を匿名にするのと同じくらい大きな効果をもたらす。もちろん、性愛の経験を象徴的に表現することは、単に読み手を意識したときだけの手段ではない。詩人は自分の愛の遍歴を象徴化することによって、自分に内在する欲求や恋愛観を見事に表現し、彼自身のためにも過去のことを冷静に解釈しようとしているのである。つまり詩人は思想によって情熱を感受

18) この表現は、Harold Bloom の言うように、*The Triumph of Life* を予感させるものである。(後述する Shelley の自叙伝的告白も登場人物 Rousseau の自叙伝的告白を予感させる。) しかし彼や Cameron が「最も荒涼とした最も長い旅」(159; The dreariest and the longest journey) を結婚生活と考えていることや、Richard Holmes や Ward が「あの多数派」(149; that great sect) を一夫一婦性に虐げられた人々と見ていることは、一面的すぎると思われる。Harold Bloom, *Shelley's Mythmaking* (New Haven: Yale UP, 1959) 215、Cameron 278、*Shelley on Love* 206、Ward 208 参照。なぜなら、ここで語られている人生は、現実での「愛」と「愛し方」の矛盾から生じる、満たされない精神状態を象徴しているからである。この点については後述する。

19) Shelley は 1822 年 6 月 18 日の John Gisborne 宛の手紙の中で、次のように言っている。“It [The ‘Epipsychidion’] is an idealized history of my life and feelings.” (*Letters* 2: 434). 「理想化された」(idealized) という言葉には、理想の体現化とデフォルメされた現実の歴史という二つの意味が隠されていると考えられる。

しようと模索しているのであるが、ここにも書くことの効用がある。Geoffrey Ward は、この部分は作品の最初と最後の均等を破り、また進行を妨げると指摘しているが、²⁰⁾ この構造への批判は、詩人の葛藤の複雑性を故意に見落としている結果である。それではなぜ Shelley は冒頭での Emilia への熱情に、三角関係(詩人、Emilia、そして Mary) に隠された現実的問題を含ませなければならなかったのか。詩人の事情を無視して読んだ場合、確かにこの箇所は難解で混乱を招くかもしれない。²¹⁾ ここは特に詩人が自分自身のために書いたと思われる。

自叙伝的告白は、詩人が青年期に入ったときから始まる。これは彼が異性に目覚めた時期であり、これによって、彼が人生で直面する様々な問題の中で特に性愛に焦点を当てていることが明確に示されている。

There was a Being whom my spirit oft
Met on its visioned wanderings, far aloft,
In the clear golden prime of my youth's dawn,
.....
She met me, robed in such exceeding glory,
That I beheld her not. (190-92, 199-200)

Shelley は「青年期の夜明け」(my youth's dawn)を迎えたとき、「一つの存在」(a Being)に出会う。この存在は、「彼女」(She)という言葉やその登場する雰囲気からも分かるように明らかに女性である。しかし、これは実際 Shelley が出会った女性ではなく、また「理想化された女性」の表象でもない。これは詩人が青年のときに訪れたある精神的な現象を表現している。それは性への目覚めであり(先に言ったことだが、それはこの自叙伝的描写の出発点が、青年期であることから理解できる)、愛への目覚めである。「一つの存在」は「愛」(存在、または対象)と「愛すること」(行

20) Ward 209-10 参照。

21) Bloom は *Epipsychidion* における欠陥の一つとして、このような個人的傾向を挙げているが、自叙伝の部分に出てくる Emilia、Mary、Claire をそれぞれ暗示した太陽、月、彗星による表現は、伝記的な参考がなくとも充分読めると指摘している (208-09)。

為) が完全に一致した状態の象徴であり、つまり「愛を完全な私たちで求めること」(「愛」と「愛し方」が一致していること)を意味している。そしてこの愛が性愛であることは、愛が女性の姿として描写されていることや、前の部分(72-123)で情熱的に表現されていた Emilia が後で登場し(321-44)、この「存在」と同一視されることから裏付けられる。

しかし、詩人は彼女の容姿を一切語っていない。詩人は彼女を見ることはできない。彼はただ、*Paradiso* における Dante のように、光によってのみ彼女を確認できるだけである。つまり彼女が象徴する性愛は、神聖なる真理として語られているのである。そこで Shelley はその表現媒体として「声」(201; Her voice)を使っている。「声」は真理を説く啓示のように精神的な産物として扱われている。森、泉、花々の香り、そよ風、雨、そして鳥の鳴き声から来る彼女の声は(201-03)、まさに自然の声であり、彼の孤独な精神に鳴り響く純粋な衝動である。それゆえに詩人は自然に彼女に惹かれるのであり、これは「愛する」という行為をしようとすることを意味している。詩人にとって、異性を愛することは神聖なことであり、「この冷寒かつ凡庸な地獄、すなわち我々の人生、そして運命を、燃え上がるような殉教のごとく栄光に輝かせる鑑識力をもつ最高の叡智」(213-15; that best philosophy, whose taste / Makes this cold common hell, our life, a doom / As glorious as a fiery martyrdom) に帰結できる行為なのである。このように、その性愛そのものを象徴する「一つの存在」の魂は「真理の和声であった」(216; Her Spirit was the harmony of truth)。

しかし、潜在的な性的欲求が青春を迎えた詩人に訪れたとき、「愛し方」(または愛する手段)を知らない彼は欲望の趣くままに、彼女に近づいてしまう。

Then, from the caverns of my dreamy youth
I sprang, as one sandalled with plumes of fire,
And towards the loadstar of my one desire,
I flitted, like a dizzy moth, whose flight

Is as a dead leaf's in the owlet light,
 When it would seek in Hesper's setting sphere
 A radiant death, a fiery sepulchre,
 As if it were a lamp of earthly flame. —
 But She, whom prayers or tears then could not tame,
 Past, . . . (217–26)

この部分では、「愛」と「愛し方」の差が象徴的に表現されている。愛への欲求に目覚めた詩人は、「一つの存在」の普遍的な光に近づこうと自分自身も輝かせ、その光と一体化しようとするが、それは一時的な欲望の炎であった。この炎は、感覚的、かつ刹那的な熱情と行為を象徴しており、²²⁾ 彼の「愛する」という行為の誤りを意味している。すると、存在と行為を包含する愛の表象は姿を消してしまう。²³⁾ 詩人に残された希望は「汝が求める幻影は汝の隣りにいる」(233; The phantom is beside thee whom thou seekest) という言葉のみである。「どこに」と具体的に聞いても、「どこに」とこだまのように戻ってくるだけである(234)。これは、愛の問題が「対象」(愛)にあるのではなく、自分自身の「行為」(愛し方)にあることを

- 22) 採用されなかった *Epipsychidion* の原稿には、この部分と関連した次のような箇所がある。

And what is that most brief and bright delight
 Which rushes through the touch and through the sight,
 And stands before the spirit's inmost throne,
 A naked Seraph? None hath ever known.
 Its birth is darkness, and its growth desire;
 Untameable and fleet and fierce as fire,
 Not to be touched but to be felt alone,
 It fills the world with glory — and is gone. ("Fragments," 142–49)

尚、ここでの引用は、Percy Bysshe Shelley, *Poetical Works*, ed. Thomas Hutchinson (Oxford: Oxford UP, 1970) 429 による。

- 23) ここでの表現と内容は、Shelley が 1821 年 2 月初旬に *Epipsychidion* を完成させる直前に読んだ Dante の *La Vita Nuova* (Mary Shelley, *The Journals of Mary Shelley*, ed. Paula R. Feldman and Diana Scott-Kilvert [London: Johns Hopkins UP, 1987] 351 によると、1821 年 1 月 30、31 日に読んだことになっている) の冒頭に出てくる Dante の夢を想起させる。また、Shelley の *Epipsychidion* の創作過程は、*La Vita Nuova* の前半部(3–21 章)における、Beatrice への熱情、愛の解積、そして愛と Beatrice の一体化という順序で進んでいく Dante の創作過程と類似している。

示している。愛する対象に惹かれていく精神とその実際的な行為の矛盾、「愛」と「愛し方」の不一致は、徐々に詩人を、*La Divina Commedia* における最初の Dante のように、「人生の冷たい森」(249; the wintry forest of our life) へと追い込んでいく。

「彼女に似た姿を見つける」(254; If I could find one form resembling hers) ために森の中をさまよう詩人は、いわば *Purgatorio* で示されている「自由意志」(free will) と真理とを調和させることができない。これは同時に、「思想」と「感情」、「存在」と「行為」、そして「愛」と「愛し方」といったものが調和していないことを示している。そこから生まれる心の焦燥は、結果として、「弱さと性急さによるめく」(251; stumbling in my weakness and my haste) 若い詩人を誤った行為に発展させてしまう。

There, — One, whose voice was venom'd melody
 Sate by a well, under blue night-shade bowers;
 The breath of her false mouth was like faint flowers,
 Her touch was as electric poison, — flame
 Out of her looks into my vitals came,
 And from her living cheeks and bosom flew
 A killing air, which pierced like honey-dew
 Into the core of my green heart, and lay
 Upon its leaves; until, as hair grown grey
 O'er a young brow, they hid its unblown prime
 With ruins of unseasonable time. (256–66)

この部分は、自然な衝動として愛したはずの詩人が、愛のない肉体関係によって、精神までも蝕まれていく様を描いているが、自然の中の「不自然さ」によって見事に表現されている。²⁴⁾ ここで詩人の見た光は、蛾が飛び

24) この部分を、Cameron のように、Shelley が Oxford 時代、娼婦との交渉によって性病に感染したことを示していると考えている学者がいるが (280)、White はここをあくまでも精神的なものとして考慮し、性病の感染という説には否定的である (2: 262)。しかし、その精神的打撃の根底には、愛のない密通があったことは確かである。

込むような一時の炎である。「若さ」や「自然の声」によって象徴される性愛は存在せず、あるのはどれも不自然かつ老年のように不活発なものである。しかし、これもまたここに登場する女性の問題ではなく、「愛し方」を誤った詩人の問題と解されるべきである。性愛はこのような愛し方によって墮落したものへと追い込まれ、結婚のみを男女間の貞節の証しと考える社会通念によって曲解されていく。愛のない肉欲によって、性愛とそれに伴う熱情が、社会に不道德な影響を与える要因と見なされる現状。その後、詩人は「愛し方」を追い求めて「美しいもの」、「賢いもの」、「誠実なもの」と出会うが、どれも見抜くことはできず、彼女らとの関係は長続きすることができない (267-75)。²⁵⁾

そんな彼の人生に一つの救済が訪れる。夢に描いたあの「一つの存在」のような「女性」(277; One) が彼の前に現れるのである。それは後に妻となる Mary Godwin である。彼女は月のように穏やかであり、その存在は詩人を「温かくすることはないが照らす」(285; warms not but illumines) ような光であった。ここから得られた詩人の心の平安は、精神的に女性を愛することから生まれた結果である。しかし、このような関係は終焉を迎えることになる。情熱の欠如である。詩人は月のような彼女に対して、太陽のように熱い感情をかき立てることができない。この歓喜も失意もない中庸の状態は、かえって彼に「生きても死んでもいいない」(300; I then was nor alive nor dead) 状態をもたらす。月の存在はやがて「冷たさ」というイメージをつくり出し、Mary との冷めた関係を暗示させていく。²⁶⁾ 再び

25) Cameron の精密な照応によると、ここで登場する女性たちは、Shelley が実際に出会った Harriet Grove, Harriet Westbrook, Elizabeth Hitchener、そして Mrs. Boinville らを暗示している (281)。

26) その後に訪れる「嵐」(storms) の部分 (308-20) には、前妻 Harriet の自殺や彼女との間に生まれた子どもたちの所有権剥奪による詩人の絶望、これらの悲劇を引き起こした Harriet の姉 Eliza への彼の嫌悪、そして Fanny Godwin の自殺という事実が含まれていると考えられる。Percy Bysshe Shelley, *Selected Poems*, ed. Timothy Webb (London: Dent, 1977) 218, Cameron 284-86 参照。また、White は、そこに登場する「嵐」(its Tempest) と「惑星」(The Planet) は、Mary Shelley, Sophia Stacey, Elena Adelaide の誰かを象徴化している可能性がある」と指摘している (2: 264-65)。

「暗い森」をさまよう詩人。しかし、そこに思い描いていた「幻影」(322; The Vision) が現れる。その幻影は太陽の化身のようであり (335; as an Incarnation of the Sun)、これこそ現実で「愛」と「愛し方」が一致できる瞬間であった。「青年期の夜明け」と同じような「長い夜の夜明け」(341; the dawn of my long night) が詩人に訪れ、彼を照らすその情熱的光こそ Emilia であった。

しかし妻 Mary を含めた三角関係は、現実的にどのような影響をもたらすのか。愛したくとも恋人として愛してはならない女性 Emilia の象徴、太陽、そして救済者ではあったが今となっては愛さなければならない女性 Mary の象徴、月。これら二つの天体の光に支配されている「この受身の地球」(345; this passive Earth) とは、現実世界に生きる詩人 Shelley のことである。妻をもつ身である詩人は、Emilia を愛しているために、良心や社会的道徳の束縛という現実的問題に遂には到達してしまう。この理想と現実の問題、すなわち「愛」と「愛し方」の不一致の問題によって、詩人は Emilia を曖昧に「配偶者、妹、天使、運命の先導者」(130; Spouse! Sister! Angel! Pilot of the Fate) と呼ばなくてはならない。しかし、最終的にこの問題をどのように解決できるのか。その手段となったのは、愛する Emilia との逃避行を詩の中で書くことであった。だが、このようにして今までの「思想の花」(384; flowers of thought) を開花させることは、決して問題の解決ではなく、精神的苦痛の解消にすぎないということを、詩人は十分に理解していたに違いない。²⁷⁾ それでも、このある種の禁欲的な方法は、そのときの彼にとって心に平安をもたらす最善の方法だった。

27) Paul de Man は、探求として出発したものが、別の構造によって飲み込まれ消滅させられる例として *Epipsychidion* や *Adonais* を挙げているが、この指摘は適当と思われる。しかし、他の例である *Alastor*、*Prometheus Unbound*、そして *The Triumph of Life* に関しては議論の余地が充分にある。Paul De Man, "Shelley Disfigured," *The Rhetoric of Romanticism* (New York: Columbia UP, 1984) 98 参照。

IV. 愛の行方

愛する Emilia との現実から遊離した島への逃避行、これを書くことの効用は、その表現の中に十分に裏付けされているといえる。二人が訪れようとする永遠なる自然の楽園は、Shelley が得意とする共感覚 (synesthesia) による世界である。特に、ここで表現されている「忘我」(ecstasy) は二つの効用をもっている。一つは Emilia との愛の成就や性愛の神聖化を観念的に体現させているということ、もう一つは詩人のアイデンティティを消滅させているということである。

To whatsoe'er of dull mortality
Is mine, remain a vestal sister still;
To the intense, the deep, the imperishable,
Not mine but me, henceforth be thou united
Even as a bride, delighting and delighted. (389-93)

(イタリックは筆者による)

「現実の世界」(mortality) では、詩人は Emilia を「貞潔な妹」(a vestal sister) として考えることしかできない。しかし、永遠なる愛を象徴する「不滅の世界」(the imperishable) においては、「自分のもの」(mine) という二人を前提とした所有の関係ではなく、「自分」(me) という一つの状態になることができるのである。つまり「愛」と「愛し方」が一致した状態を象徴化しているのである。ここで詩人は、自己の世俗的な立場を脱却させ、かつ Emilia と一体となることに成功している。²⁸⁾ だが、ここで決定的な「比喩の逆転」²⁹⁾ が起きる。「妹」という現実的な属性を離れ、理想世界の中で詩人と精神的に一体となった Emilia は「花嫁」(a bride) という

28) Bloom が指摘するように、*Epipsychidion* は *Prometheus Unbound* 同様、神話作成 (mythopoeia) の手法が用いられている (209)。しかしここでは、神話作成によってつくられた性愛の関係を通じて、人間 (Prometheus) と愛 (Asia) との関係を象徴化するという *Prometheus Unbound* での手法と、全く逆の手法が取られている。

29) この用語は、用例は異なるが、*Poetry and Prose* 169 の脚注から借用した。

再び現実的な属性によって喩えられるのである。二人の関係は現実を超越した愛として象徴化されたものの、この直喩によって再び現実的な関係へと逆戻りしてしまう。したがって、この逃避行は単なる現実逃避とは言い難く、詩人はここでも Emilia を異性として愛することができない現実に悩まされているのである。

それでも、詩人は自己の理想、すなわち「真の愛」(397; true love)を詩の中で実現させることによって、自分の苦悩を沈静化させていく。Dante 的な森は、現実生きる自分の精神状態を象徴化していた。しかし現実から遊離した島では、そのような森は消滅し、それに代わって Shakespeare 的な森が登場する。これは詩人の魂 (spirit) から発する神秘と奇跡の世界であり、ここで彼は *The Tempest* の Prospero のように、思いのままに要素 (element) を操ることができるのである。³⁰⁾ ここで展開される自然は、変化はするが永遠に繰り返される季節の循環、いわば「緑と金の不滅性」(469; green and golden immortality) であり、真理としての愛の姿である。ここで Shelley は逆説的な意味で、自己の理想を「現実のもの」(512; reality) としてしまう。愛と愛することが一致し、「愛することと生きることが一つになる」(551–52; to love and live / Be one) のである。もちろん、これは同時に詩人の現実での願望を意味しているといえる。前半での熱情や「愛」の問題は、理想世界の中での情熱的な愛の成就によって消滅されていく。つまり筆者としての詩人の心境は、「静けさ」や「眠り」というような言葉によって一つの bathos を生み出そうとするが、それと反比例して、詩の中の Emilia への愛は、情熱的な魂の結合によって climax を迎えるのである。

30) 森の描写の “with sound that never fails . . . And all the place is peopled with sweet airs;” (443–45) という部分が *The Tempest* の “the isle is full of noises, / Sounds, and sweet airs, that give delight and hurt not.” (III. ii. 133–34) を暗示しているように、*Epipsychidion* の後半部分には Shakespeare の影響が見られる。尚、*The Tempest* からの引用は、William Shakespeare, *The Tempest*, ed. Stephen Orgel (Oxford: Oxford UP, 1987) 162 による。

The fountains of our deepest life, shall be
 Confused in passion's golden purity,

 One passion in twin-hearts, which grows and grew,
 'Till like two meteors of expanding flame,
 Those spheres instinct with it become the same,
 Touch, mingle, are transfigured; ever still
 Burning, yet ever inconsumable. (570-71, 575-79)

理想世界で愛を情熱によって昇華させ、現実世界で心の状態を鎮静させた詩人は、

... one life, one death,
 One Heaven, one Hell, one immortality,
 And one annihilation. Woe is me!

 I pant, I sink, I tremble, I expire! (585-87, 591)

という二分化した極限状態の中で幕を閉じようとする。しかし、書くことによって、心の熱情や葛藤を一時的に解決させた詩人はその後どうなるのだろうか。

V. 新たな問題

Shelley は出版社の Charles Ollier に *Epipsychidion* を匿名で出版するように頼んでいるが、その中で次のようなことも言っている。

... I make its author a secret, to avoid the malignity of those who turn sweet food into poison; transforming all they touch into the corruption of their own natures.³¹⁾

これは、自分を明かすことによって *Epipsychidion* が多くの誤解を招くことを詩人が不安に思っていた証拠である。詩人を無視した読み手の立場から

31) 1821 年 2 月 16 日の Charles Ollier 宛の手紙 (*Letters* 2: 262-63)、また同年 2 月 22 日の Charles Ollier 宛の手紙 (*Letters* 2: 269) 参照。

考えると、この主観的立場から作られた作品を、理論的に理解できずに難解だと考えるのは当然の結果である。また、出版されたときの Advertisement には架空の作者が登場する。

The Writer of the following Lines died at Florence. . . . The present Poem, like the *Vita Nuova* of Dante, is sufficiently intelligible to a certain class of readers without a matter-of-fact history of the circumstances to which it relates; and to a certain other class it must ever remain incomprehensible, from a defect of a common organ of perception for the ideas of which it treats.³²⁾

自分自身を殺し、また書かれた事情も隠すことによって、作品そのものを読者に認知させようと要求するところは、Shelley の詩人としての挑戦のように思われる。それはイタリアの最も偉大なる詩人 Dante の作品と肩を並べようとしていることから伺える。しかし *La Vita Nuova* には、詩の他に、詩の題材となった逸話と詩の分析が Dante 自身によって付け加えられていることを忘れてはならない。³³⁾ もちろん Shelley にはそのようなことはできなかった。*Epipsychidion* には *La Vita Nuova* のように「感情と言葉の純粋さ」(purity of sentiment and language)³⁴⁾ があるとしても、彼には別の問題があった。Advertisement の草案では、この死んだ架空の詩人はイギリス人で、妻と思われる女性がついていたが、最終的にはその部分は消えており、³⁵⁾ 自分の立場からできるだけ離そうとする詩人の配慮が見られる。さらに、Michael Laplace-Sinatra が指摘しているように、Shelley

32) *Poetry and Prose* 373.

33) Barbara Reynolds の言うように、「*La Vita Nuova* は、詩人による、詩人たちのために書かれた、詩という芸術に関する論文である」(Dante, *La Vita Nuova*, trans. Barbara Reynolds [London: Penguin, 1969] 11)。これはいわば創作文学の研究の範疇にあり、この特質は(作者の自伝的要素を含めれば) *Epipsychidion* にもあるといえる。

34) *A Defence of Poetry, Poetry and Prose* 497.

35) "The following Poem was found in the PF. of a young Englishman . . . He was accompanied by a lady [who might have been] supposed to be his wife" (*Poetical Works* 425).

の序文には自分の作品の受容への先入観が強く反映されている。³⁶⁾ Advertisement には、詩が理解できないのは読者の「理解する共通器官の欠如」(a defect of a common organ of perception) が原因であると書いてあるが、³⁷⁾ この詩の場合、決して(詩人がよく序文で読者に要求する)自分の思想や表現への理解だけにに関する問題ではない。³⁸⁾ Shelley は自分の本心に、詩、さらに偽名という膜を張ることによって自分自身を直接的に曝け出した一方、その危険性も十分覚悟していたに違いない。出版自体は、書き上げたものは出版したいという、彼の詩人ゆえの付随した願望の結果であったのではないだろうか。

Shelley は、*Epipsychidion* のことを「僕のすでに死んだ一部からできた産物」(a production of a portion of me already dead)³⁹⁾ と言っている。また彼は、Emilia への愛が完全に冷めている 1822 年 6 月 18 日、John Gisborne 宛の手紙の中で、Emilia を愛したことを次のように結論付けている。

The 'Epipsychidion' I cannot look at; the person whom it celebrates was a cloud instead of a Juno. . . . I think one is always in love with something or other; the error, and I confess it is not easy for spirits cased in flesh and blood to avoid it, consists in seeking in a mortal image the likeness of what is perhaps eternal.⁴⁰⁾

36) Michael Laplace-Sinatra, "Shelley's Editing Process in the Preface to *Epipsychidion*," *Keats-Shelley Review*, 11 (1997) 173. この論文で、Laplace-Sinatra は Shelley の詩における序文の重要性を主張している。

37) Ward は、「欠如」(defect) とは、詩の感情的特性のため、「言葉を理論的水準で作用させることに気が進まないこと」でもある、と的確な指摘をしている(205)。だからといって、我々が *Epipsychidion* を修辞学的に一方的に批判し、価値を評価するのは賢明なことではない。

38) もちろん Shelley は、*Prometheus Unbound* の出版のときのように、この詩の表現上の難解さについて十分に理解できる読者を要求していた。"It is to be published simply for the esoteric few. . . those who are capable of judging and feeling rightly with respect to a composition of so abstruse a nature, certainly do not arrive at that number [one hundred] — among those, at least, who would ever be excited to read an obscure and anonymous production; and it would give me no pleasure that the vulgar should read it." (*Letters* 2: 263).

39) *Letters* 2: 262–63.

40) *Letters* 2: 434.

しかし、この言葉は、現実と理想を反転させて観念化したものにすぎない。多くの批評家たちは、Reiman のように、⁴¹⁾ Emilia を「普遍的理想の肉体化」や「理想美」(Intellectual Beauty) と考えているが、Shelley は *Epipsychidion* の中で、Emilia を通じて理想を肉体化しているのではなく、肉体化した女性 Emilia を「愛する」という行為を神聖化している、と筆者は考える。なぜなら理想の問題は、Emilia (存在)にあるのではなく、理想を求めようとする詩人自身(行為)にあるからである。「理想美」を個人的な同情の渴望から生まれたものとするなら、それは自己の精神や行為の自発的な問題なので議論の余地はある。しかし現実の問題として、人は「愛」の解釈をする前に、「愛する」という行為をするということを忘れてはならない。

「思想の花」から実を結ばせ、詩の中で Emilia との愛を鎮静させた Shelley だが、現実では「愛すること」を続けなければならない。結句 (envoy) の中で、

... "Love's very pain is sweet,
But its reward is in the world divine
Which, if not here, it builds beyond the grave."
So shall ye live when I am there. (596-99)

と書かれているように、たとえ彼が死んでも、「愛する」ということは、永遠に賞賛されるべき主題である。しかし、たとえその行為の神聖さを理解していても、それが不変的なかたちで実現できない(愛せない)理由こそ、まさしく「人生」(Life)なのである。

Epipsychidion の中で「人生」(または現実世界)は、「人生の苦しい道」(72; life's rough way)、また「人生の淀んだ波」(119; life's dull billows) のように、絶えず否定的なものとして表現されている。「人生」における問題は、具体的に Emilia の不遇に始まり、詩人自身の恋愛から生まれる社会的か

41) Percy Bysshe Shelley 127, 131.

つ私的な問題を経て、なぜ人間は現実の障害の中で（異性の）人を愛するのかという、つまり「愛」と「愛し方」の不一致という人間の本質的な問題へと到達する。しかし Shelley は「愛すること」を理想的に詩の中で表現することによって、この問題を「自己の精神の平安」というかたちで一時的に解決させたただけであった。その後、Shelley は友人 Edward Williams の妻 Jane に想いを寄せることになる。彼は彼女に対する愛の葛藤を暗示させる詩や、また彼女に捧げる詩を数編書いたが、自分の心にある「愛」と「愛し方」という問題においては、Emilia を愛したときと同じ手段を取るわけにはいかなかった。不慮の死を遂げる 1822 年、詩人 Shelley は、「理想世界」ではなく「現実世界」（人生）を描くこと（書くこと）によって、この問題に取り組もうとする。*The Triumph of Life* の執筆である。